

かたらい

58号
2023 秋

特集 「アンコンシャス・バイアス ～無意識の思い込み～」

p2

寄稿 「アンコンシャス・バイアスとは何か ～その仕組みと対策～」

東洋大学社会学部社会心理学科教授 北村 英哉さん



p4

寄稿 「子どもや子育て、家庭における 身近なアンコンシャス・バイアスについて」

一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所 認定トレーナー
感情保育学研修所代表 野村 恵里さん



p7

小金井で働く

「何歳からでもリスタートできる社会へ」

就労継続支援B型事業所 ムジナの庭

施設長 鞍田 愛希子さん



p8

ジェンダー探求

寄稿 現代日本語における性差・ジェンダー
～日本の配偶者呼称はなぜ男尊女卑的なのか～

東京農工大学准教授 任 利さん



p10

配偶者暴力防止法が改正されました

日本における男女共同参画の進展が十分ではない要因の一つとして、「アンコンシャス・バイアス」の存在が挙げられます。「アンコンシャス・バイアス」とは、「男性は仕事、女性は家事育児をすべき」といった固定的性別役割分担のような、「無意識の思い込み」のことを言います。今号では、様々な視点からの「アンコンシャス・バイアス」を紹介させていただきます。



寄稿 「アンコンシャス・バイアスとは何か ～その仕組みと対策～」

北村 英哉さん

東洋大学社会学部社会心理学教授。大学院研究科長。
東京大学大学院社会学研究科博士課程中退。社会心理学博士。
関西大学社会学部教授を経て現職。専門は社会心理学、感情心理学。人間の大切さを中心に置く心理学の視点から、どのようにして互いに他者を尊重して、社会を営んでいけるかを研究している。著書に『あなたにもある無意識の偏見：アンコンシャス・バイアス』（河出書房新社、2021年）など。

◆アンコンシャス・バイアスと偏見

人は日常、たくさんの思い込みのなかで生きています。科学技術の成果の利用、そのひとつのスマホの利用についても、使用する人がその機械的仕組みをよく理解して使っているわけではありません。テレビのリモコン一つとっても、このボタンを押したら、スイッチが入るはずだという前提のもとで用いています。これは正確に言うならば、科学理解というよりも科学信奉であり、この動作をすればきつとこういう結果が得られるはずだと信じていることから来ているわけです。ただ、この信用は科学技術への信用で、電池切れでない限り、だいたいはそのように動作するのでますます私たちは信用を深めます。

このように仕組みを正確に理解してなくても、「そういうものだ」と信じていることで動いている事柄が、日常にはたくさんあります。

社会心理学の実験（ヒックマンらによる）で、警備員の服を着た人がコインパーキングで不足する小銭を見知らぬ指定した人に与えるように通行人に指図したら、ほとんど皆が従ったということがあります。同じことを制服を着ない若者が依頼しても、それほど効果は見られません。制服だけ、その職業の人と信用してしまうエラーは、詐欺をする人が電力会社の社員を装うなど、さまざまなケースがあります。制服などのちょっとした手がかりで、人の職業を推定するということは、ひとつの

分類作業であるわけですが、人というものは分類の達人であり、これを心理学ではカテゴリー化と呼びますが、何でもすぐにカテゴリー化できてしまいます。イヌとネコを見誤ることはほとんどなく、私たちは瞬時に分類をしてしまいます。これは、良い人と悪い人の分類でもそうで、多くの人が守っている社会のルールに従っているのは良い人であり、従わないのは悪い人であると、まずは簡単な分類がなされがちです。

ルールから外れたことをしている人の本当の事情などを知る機会はまれですし、ふうう、そういったことを人はいちいち斟酌（しんしゃく）しません。

しかし、そのルール自体に妥当性があるでしょうか。かつては、「女性が家事をするもの」という考えに大勢の人が従っていた時代がありましたし、今もかなりそういった側面は強く残っているのではないのでしょうか。「警察官は信頼できる」、「女性が家事をする」こういったことは、実のところ、思い込みでしかありません。こうした紋切り型のイメージ的な思い込みを「ステレオタイプ」と呼びます。そして、そこに価値判断を加えたものが偏見です。「家事をしない女性はだらしない、あるいは怠け者で悪い」となると、これは偏見ということになるでしょう。

そういった「思い込み」が本人もあまり強く意識することなく、無意識で行われるとき、これを「アンコンシャス・バイアス」と呼びます。

◆アンコンシャス・バイアスが起こる仕組み

アンコンシャスは無意識、バイアスは歪みという意味ですが、アンコンシャス・バイアスと偏見にそれほどの違いはありません。ただ、特に、「アンコンシャス・バイアス」はそれが無意識であるという特徴があります。女子校生が工学部に進学を望んだときに、親が「女子に理系は難しいのではない」と悪気なく言うとき、それがアンコンシャス・バイアスです。アンコンシャス・バイアスは人の自由な選択を妨げることや、古い価値観で未来のある人の将来を狭めること、あるいは心を傷つけるなど、良くない結果を生み出すことがしばしばあります。

私たちの生活は、「普通こうなる」というルーチン的な思い込みに溢れていますので、その通りにことが運ぶかぎり、スムーズで快適に感じられやすいのです。思い込みが間違いの時にはひっかかりが生じますので、これを面倒に感じる人も出てきます。生まれの性が男性で性自認が女性であるトランスジェンダーの方の女性トイレ使用などの問題も、一般の人にとって「普通と異なる」事態を考えなければならぬので、抵抗感や面倒な気持ちが起こりやすいのです。

しかし、私たちはみんなそれほど「普通」でしょうか。人にはそれぞれ個性がありますし、考え方もさまざまです。そういったことに目をつけることから、アンコンシャ

ス・バイアスは生じるのです。面倒に思う気持ちが見え差別につながっていくことがあります。

学校で授業中立ち歩く発達障害の子どもがクラスに一人いた場合、「この子一人さえいなければ授業運営がスムーズなのに」と考えてしまうかもしれませんが、これは立派な差別の始まりです。多様な児童・生徒がいても、副担任やチューター、特別支援の補助教員などの制度を活用して、円滑に運営できるように態勢を整える方が、生産的で多様性を包摂することができます。補助教員がいれば、発達障害の子どもばかりでなく、その場で話についてこれなかった子ども、細かな点の質問がある子どもなど、みんなの学習に広く役立ちます。授業の理解度が向上すれば、より高度な学習も可能になりますし、クラスの活気や雰囲気にも好影響が期待できます。困っている一人を救うことによって、全員にとってメリットがあるということは、よくあります。

◆油断できない「好感度」

人は他者から好感をもたれたいものです。好意的に扱われれば、嬉しいもので、自己肯定感も上がります。しかし、アメリカの社会心理学者で偏見、ステレオタイプの研究、スーザン・T・フィスクは、両者の研究(注1) 差別や相補的(注2) 偏見という肯定的なイメージと否定的なイメージを抱き合わせにして、なかなか変化しにくい持続的な差別的仕組みを解き明かしました。働く女性への差別、バックラッシュ(注3) には、「子どもが小さい間は母親が身近で乳幼児の面倒を見るべきだ」といった伝統的役割の押しつけがあり、社会全体で子どもを育てるのではなく、子育てはす

べて各家庭が中心で解決されるべきものといった考え方が横たわっています。そのため、働く女性に対して、「能力は高いが冷たい」というイメージが抱かれ、専業主婦は子どもや家族のケアを行う「温かく優しい人」であるとの肯定的評価があるものの、フィスクはその裏側に「仕事を退職して仕事能力が衰えた能力の低い」人という否定的イメージが潜んでいることを指摘しています。

つまり、この枠組みでは、人の「能力」と「性格」という二つの側面において、肯定的と否定的のセットができあがって、長所と短所が抱き合わせになっていると見られるのです。フィスクは、働く女性への「性格はグスグスしている」というバックラッシュを敵対的差別と命名し、主婦たちへの「能力は低い、性格は温かい」という取り扱いは温情的差別と命名しました。

女性の方が男性より「細かなことによく気づいて、心配りができる」という一見褒め言葉も、「だから育児や介護などの人のケアには女性が向いている」というバイアスにつながり、家事・育児・介護の女性への押しつけという慣習が維持されてしまうからくりとして働いていることを指摘したのです。

「気が利く」と肯定的なことを言われて、喜んでいるだけでは済まない社会的仕組みがあるものと考えられます。実際、男性も働いている場においては上司の顔を窺ったり、顧客や取引先と信頼関係を構築したり、十分、「気を遣う」ことができているはずですが、男性・女性というステレオタイプに陥りすぎないで、客観的にみれば、性別による差よりも個人差の方が大きく、女性でも男性でも気の利かない人はいくらでもいるし、気の利く人も同様に、女性にも

男性にもいることにすぐ気づかれるでしょう。

◆アンコンシャス・バイアスを乗り越えるには自分だけでできる対策

小さいお子さんがいる女性に、つい、「こんな夜に大丈夫なの」と声をかけたり、「負担の小さい仕事が良いに違いない」と本人に確認をとらずに、決めてしまったりすることにアンコンシャス・バイアスは現れています。「女性は若い方が良い」「おかあさんに見えないね」というのが褒め言葉だと考えるのも配慮の足りない見方もありません。

こうしたアンコンシャス・バイアスを乗り越えるにはどうしたらよいのでしょうか。

(1) 視点取得

まず、相手の立場にたつて、どうであるのかを想像してみるといい視点取得があります。ひとはまだ年少では他者の視点から物事がどう見えるか、心理的にも物理的にも未熟でわかりません。だんだんと他者の視点に成り代わることができるようになりますし、それには、想像力を身につけていく経験も役立ちます。自分だけの経験では狭いので、異なる生育環境や価値観で生きてきた他者のものの方を知るためにも小説に触れることなども有意義でしょう。自身の言葉が相手にとって困らせること、不愉快なことであると、想像がつくようになるとよいですね。

(2) オープンさ

とはいっても、自分自身で気づかないのが、アンコンシャス・バイアスですので、身近な他者に指摘してもらおうのが早道かもしれません。人からの忠告に耳を傾けるオープンな姿勢を日頃から心がけること

で、部下や周りの人から積極的に意見を聞き、取り入れることが可能になるでしょう。苦言に対して腹を立てずに、感謝して耳を傾けることができる鷹揚さや器の大きさが必要です。

(3) 対話

前の二つともつながりますが、アンコンシャス・バイアスを発動させないためには、何より当事者同士、相手ときちんと対話することが求められます。偏見を適用してしまうのは、つい「ふっ」と考えてしまう「標準」に目の前の人をあてはめてしまうことによりです。確かに男性らしさ、女性らしさというのも現状で、平均値で見れば、差が見えるかもしれませんが、平均値であるとは限りません。人の考えはさまざまです。それを自覚して、気をつけていけば、「この人の意見はどうだろうか」と対話というチャンネルが開け、話し合いが成立します。特に仕事の進め方や家庭内の家事分担なども、一方的な思い込みではなく、率直に語り合ってみれば、決着点も見出すことができるかもしれません。

普段よりもほんの少しの気遣い、そして頭を使うことで、決定的な不仲や、あるいは管理職失格の烙印を押されるのを免れるかもしれません。

注1…一つの物事に対して、逆の感情を同時に持つこと。

注2…お互いに補い合うような関係。

注3…「反動」や「揺り戻し」。平等の推進や地位向上などに対して反発する動き。

寄稿 「子どもや子育て、家庭における

身近なアンコンシャス・バイアスについて」

野村 恵里さん

一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所認定トレーナー。感情保育学研究所代表。旭川荘厚生専門学院児童福祉学科特任講師。

保育士・幼稚園教諭。日本アングーマネジメント協会アングーマネジメントコンサルタント®。色彩心理コミュニケーター。

岡山市公立保育園で20年間勤務後、2014年4月、講師業を開始。保育者向け書籍の出版、保育雑誌特集ページやコラムの執筆等を行なっている。著書に『とっさの怒りに負けない！子育て』（すばる舎、2023年）など。



居心地よい家庭環境、自分らしい子育てって？

子どもを持つ親にとって、毎日の子育ては常に「自分のそば」にあるものではないでしょうか。そんな日常が、辛いと感じたり、大変だったり、ネガティブな感情を抱えて疲れ切っていると子どもに笑顔で向き合うことが難しくなってしまうかもしれません。

「最近イライラしているな」と感じることはありますか？実は子どもはとても敏感です。周りにいる大人が、不機嫌な状態過ぎていっているのに、「子どもはご機嫌！」なんてことはないように思います。それは、情動が伝染してしまう性質を持っているからかもしれません。不機嫌は巡り巡って自分と家族をご機嫌生活から遠ざけてしまうのです。私も、子育て中の母親です。どうせなら、毎日の子育ては、笑顔でありたいと思っているのですが、皆さんはどうですか？

では、自分や子どもにとって「居心地よい家庭環境がある」としたらどういう状態なのでしょう？また、「子育てに正解があるとしたら、いったいどういう状態なのでしょう？」。このように、問いかけてはみたものの、私自身は、「正解は○○です！」と、お答えすることはできません。なぜなら、「正解の形は人それぞれ違う」と思うからなのです。

アンコンシャス・バイアスに気づくことで子育てが楽になる？

私が、「子どもにとって、居心地よい家庭環境の正解はない」「子育てに正解はない。子育ての形は人それぞれ違う」と、明確に思うようになったのは「アンコンシャス・バイアス(無意識の思い込み)」に出会ったことが大きく影響しています。もともと

の学びの発端は、子育てで感じる不満や不安、イライラや怒りにアンコンシャス・バイアスが深く関係しているのではないかと思っただけで、きっかけでした。

私は現在、アンコンシャスバイアス研究所の認定トレーナーとして保育、子育ての現場で子どもに向き合う人たちにアンコンシャス・バイアスをお伝えする講師活動をしています。子どもの身近な存在である大人がアンコンシャス・バイアスを知ること、子どもの可能性を気づかぬうちに潰してしまうことがないように、また、子どもが生き生きとした未来を生きるための心の土台を作る乳幼児期にアンコンシャス・バイアスを意識しながら関わることがどんなに素晴らしいことなのかを伝えたいと思っています。

そしてなにより、「アンコンシャス・バイアスに気づこうと意識することで、これまでとは違った物の見方や考え方ができるようになったり、ほんのちよつと自分を楽にしていられるようになったりするんだよ」と、私が感じたような「気持ちがあふつと軽くなる感覚」を、毎日頑張っている子育て中の方々にもお伝えできたらと思っています。

アンコンシャス・バイアスって？

私たちは、何かを見たり、聞いたり、感じたりしたときに、実際にどうかは別として「無意識に」こうだ「と思ひ込むこと」があります。これをアンコンシャス・バイアスと言います。日本語では「無意識の思い込み」なども表現されています。例えば、次に紹介するような経験はありませんか？

- 血液型で、相手の性格を想像することがある
- 親が単身赴任中と聞くと、父親を思い浮かべる
- 「普通は〜だ」「たいてい〜だ」という言葉を使うことがある
- 評判や噂で相手を見ることがある
- 挑戦する前に、「私にはきつと無理」と、思うことがある
- 「うちの子に限って」と思うことがある
- 「男の子らしく」「女の子らしく」と思うことがある
- 「男の子なんだから」「女の子なんだから」と思うことがある

いかがでしたか？

もしかしたら、「どれも当てはまらない」と思う方もいたかもしれませんが、「経験があるな」と感じた方もいたかもしれません。上記の内容は、家庭や子育て、また職場など日常にあふれているアンコンシャス・バイアスのごく一例を紹介したものです。ちなみに私は、初めてこれらのアンコンシャス・バイアスの例を見たとき、「全部、経験があるな」と感じたことをお伝えしておきます(笑)。

私たちは、「過去の経験」や「見聞きしたこと」に影響を受けて、無意識のうちに(知らず知らずのうちに)、きつと、こうだ「と思ひ込んでいることや、偏ったものを見方をしていることがあるのかもしれない。

もし、「全部の経験がある、これってダメなの？」と心配になった方がいたら、安心してください！実は、アンコンシャス・バイアスは、日常にあふれてい

て誰にでもあるものだから。

アンコンシャス・バイアスは、相手に対するものもあれば、自分自身に対するものもあります。また、物に対して、出来事に対してというものもあります。つまり、アンコンシャス・バイアスは、私たちにとっても身近な存在といえるのです。

アンコンシャスバイアス研究所では、アンコンシャス・バイアスを「アンコン」と略して使っています。合言葉のようで素敵でしょう(笑)

では、ここから、もう少し家庭や子育てにおけるアンコンについて、一緒に考えていきましよう。

■アンコンって、完全になくせるの？

ここは、ズバリ言います！「アンコンを完全になくすことはできない」です。完全に払拭(ふっしょく)することはできない。だからこそ、「アンコンに気づこう」とすることが大切なのだ、と思います。

ちなみに、私は、「アンコンに気づけて良かった、気持ちが楽になった！」というのが一番の感想です。正直なところを告白すると、はじめは「アンコンまみれの自分に気づいて、ひどく落ち込んでしまった」という過去の自分がいるのですが、今は違います。アンコンに気づけたことで、「こうじゃなきゃダメだ」「自分がやらないと！」「みんながしてるんだからうちの子も」なんて反発するの!」「そんなの無理に決まってる。」などなど、子育てのしがらみ的な呪縛から解放されたような気持ちになって、すごく楽になったのです。

「これまで、自分のアンコンで自分を縛っていたんだな」と気づくことができたからこそ、「もしかしたら、〇〇したら楽になるかも」「〇〇の方法を試してみたら、う

まくいくかも」「子どもも、〇〇だと納得してくれるかも」といったように、今までの私のアンコンを「上書き」するイメージで子育てを柔軟に考えられるようになったのです。

では、なぜこれまで気づくことができなかったのか？それは、アンコンは無意識がゆえに気づきにくいものだからだと思えます。でも、アンコンを学ぶ機会に出会ったことで、なぜ不満や不安を抱えたり、イライラしたりしていたのかの原因を知ることができ、かなりスッキリしたんです。自分がダメなせいじゃない、自分のアンコンに気づいてあげられなかったから、それが私の子育てに影響していただけなんだと、自分を責めなくても良くなったからです。

そして、私にたくさんあるアンコンがあるように、パートナーや子どもにも、それぞれにアンコンがあるかもしれないということに、目が向けられるようになりました。「私とは違う」と、受け入れる努力ができるようになりました。受け入れられるようになるまでには、時間がかかり、最初は大変でしたが、続けていけばできるようになってきたのです。これは私の成長です(笑)。そしてなにより、自分を責める回数が減ることで、心に余裕ができて、子どもを責める回数が減ってきたのが最大の効果だと思っています。

■アンコンシャス・バイアスに気づかずいたときの問題って？

アンコンシャス・バイアスに気づかずいたときの問題点は、「アンコンに気づかずいたときの判断や言動が、ときに、相手を傷つけてしまったり、自分自身の可能性を狭めてしまったり、イノベーションの芽を摘んでしまったりというように、ネガ

ティブな影響を及ぼすことがある」ということです。

自分が正しいと思っていたり、当たり前だと思っていたりすることも相手にとってはそうでない場合もあるからです。同じ言葉であっても、受け止め方は人によって様々です。

親が愛情を持って叱った一言が、子どもの心を傷つけてしまうことだってあるからです。子どもの性格、発達年齢、理解力によって解釈も変わるし、感じ方も変わります。子どもが夢を語ったとき、親の軽い気持ちで「そんなの無理に決まってる」と一蹴されたとしたら？もしかしたらその一言で、子どもの可能性を狭めてしまうことだってあるかもしれません。アンコンは誰にでもあるものです。だからこそアンコンの知識は、子育てを快適に変えてくれるキラキラアイテムになってくれると思うのです。

■アンコン・メモで「気づく」ことから始めてみよう！

ぜひ、あなたにしてみたいこと。それは、「アンコン・メモ」を1週間つけてみることです。子育てにおいて、人(家族・子ども・友だち・同僚など)に対して、自分に対して、仕事において、その他どんなことでも構いません。「え？」「なんで？」と感じたとき、「これって私のアンコンかも」と自分に問いかけてみてください。アンコンを意識してみてください。そして、気づいたときに相手の反応も確認してみてください。自分の気持ちを感じてみてください。ちょっとでも違和感があったなら、それを放置せず会話をしてみてください。「もしかして、傷つけてしまった？」と子どもに聞いてみてください。悪かったなと

思ったら、素直に「ごめんね」って言うてみるのもいいかもしれません。そして、うまくいったこと、成功したことに光を当ててみてください。

■親のアンコンを押し付けてしまうのはNGです

アンコンは、完全にはなくせないからこそ気づこうとすることが大切です。気づくことができれば、それが新たな経験になってアンコンをより良い成功体験として上書きすることができます。それが、今後の家庭環境や子育ての未来を幸せなものへと変える一歩になるかもしれません。

一人一人、その時々と向き合うことを大切にしながら、あなたらしい家族の形、子育ての形を見つけてもらえるといいです。



特集について

無意識のうちに誰でもが持つ偏見や差別意識は、知らぬうちに他人を傷つけるという弊害をもたらす。対策として、まず自分自身への気づきと人々の間での対話が必要と識者は述べている。私は、それに加えて、バイアスを生じる社会システムの改革が必要と考えている。

(伊集院正)

小金井 働く

「何歳からでもリスタートできる社会へ」

鞍田 愛希子さん

生活や就労に障がいのある方が心身のバランスを取り戻し、次のステップへ進みやすくするための就労支援施設「ムジナの庭（令和3年3月開設）」。
開設までの経緯や鞍田さんが感じられた「アンコンシヤス・バイアス」について、お話を伺いました。

❖これまでの活動について

植物に関する仕事・活動を十年以上していましたが、始めに就いた仕事は植木屋さんでした。両親の田舎がどちらも香川県で、植物が多い土地で育ったというのが、原風景としてあったのかもしれない。

私は大阪で生まれ、神戸に引越して、大学時代は京都で、京阪神に約十年ずつ住んでいたんです。

ある時、関西弁を話している自分に急に違和感を覚えて、職場も住む場所も決めずに、次の日にはもう東京に行っていた……。ちよっと変わり者なんです(笑)。その時は、色々縁があって親方に拾ってもらい、植木屋さんで一年半お世話になりました。腰を痛めてしまって兵庫に戻った後は、三年半くらいお花屋さん勤めました。

その後、結婚を機に京都へ移り、花の香りをクリームに移し取る「アンフルラー



ジュ」という事業に関わって独立し、アロマテラピーを学び、アロマの講師等もしていました。

❖植物と心のケア

大学時代は無気力になりやすく、眠れないことがありましたが、植木屋になってから、ぐっすり眠れるようになりました。植木屋になって体をよく動かすようになったこともありますが、木の香りや温もりなどが体に効いている感覚があり、心の問題は体から解決できるのかもしれないと感じました。

さらに、アンフルラージュやアロマのワークショップで参加者に香りを嗅いでもらうと、皆さんの顔がぱあっと明るくなるんです。

そんな経験から、心のケアについて、より専門的に深く学んでいきました。アロマは肩こりやお腹が痛い時などにも、セルフケアで使えるので便利です。

❖施設をつくらうとしたきっかけ

京都での個人事業の仕事は、お客さんも増え約三年ほど続けていましたが、家族の仕事の関係で、東京へ引越すことになりました。東京という新しい環境で、植物や

アロマに関する事業をまた一から立ち上げるのは大変だと、途方に暮れたりもしていました。

東京に来る前は、相手の心や体の状態に合わせたアロマをブレンドする、アロマカウンセリングという事業も行っていて、より相手の心や体のケアに関わる機会が増えていたことや、植物で元気になった自分自身の体験から、アロマ等で誰かの力になればと思うようになり、精神疾患の方が主に通われる作業所で、仕事をすることにしました。その作業所では、アロマの講座をしたり、ベランダ園芸や植木の剪定もしたりしていました。これまで、植物の分野で行っていたことを、福祉の分野に持ち込んで働き始めたのが、福祉業界での活動の始まりになります。

その後、作業所で働きつつ、フリースクールの寮母や、障がいがある方の就労支援を始めた。精神保健福祉士の資格を取得したりと、福祉の活動が深まっていきました。そういった色々な経験を経て、自分なりの「居場所」を作りたいなと思うようになっていきました。

居場所への気持ちが高まってきた頃に丁度、KOTO(注1)で開催された「まちのインキュベーションゼミ」(注2)に参加したことで、福祉施設開設へのプランがまとまり、実現へと進めることが出来ました。



福祉についての学びを深めていくにつれ、日本は世界に比べ、精神科病床がずば抜けて多いことや、ひきこもりの背景に精神疾患が隠れていることを知りました。入退院を繰り返す方や、長期間ひきこもり状態だった方にとっては、「自分に合った生活の仕方」がなかなか見つけれないケースも多く、ムジナの庭では、働き方だけでなく、様々な暮らし方の提案を行っています。

❖これまでアンコンシヤス・バイアス(無意識の思い込み)を感じたことは?

ムジナの庭に来られた方によく、「誰が

スタッフで誰が利用者か分からない」と言われることがあります。これは、「障がいがある人はこういう人だ」とイメージを持たれていた方が、「自分たちと変わらないんだ」とびっくりされたんだと思います。行動障がいがある方や身体が不自由な方のような、目で見て分かりやすい障がいのイメージを、障がいを持つ方全般のイメージとして捉えている方が多いと感じます。

「障がいは目に見える」とみなさんが無意識に思い込んでいるのかもしれない。周囲の方に、配慮を必要としていることを知らせるものとしてヘルプマークがありますが、つけると「甘えるな」「座りたいからつけているんじゃないか」と言われたり、余計に危険な目に合う場合もあるように、あえてつけない方もいます。ヘルプマークをつけていない人の中にも、配慮を必要としている人や本当はヘルプマークをつけたい人たちがいます。普段、自分の周囲には健康者しかいないと錯覚すること、ムジナの庭に来れば、目に見える障がいのある方に出会えると思うことは似ているのかなと感じます。

また、コミュニケーションをとる時に、「どう関わったらいいんだろう」と初めは様子を見る方もいますが、一緒に作業するうちに、「いつも通りでいいんだ」と、気付きや変化の機会に立ち会うこともよくあります。

一方、自分たちの思い込みとしては、施設や障がいに対する捉え方、という点があると思います。周囲の方が利用者の方に、「ムジナさんを見つけてよかったですね」と言われることがあります。利用者の方の中には、ムジナに来ていたことを隠したいと思っている方もいます。

私たちがどんなに居心地のいい場所を作ったとしても、通所していることを隠し

たいと感じる方もいるという、障がいという言葉にかかると「十字架のようなもの」は、すごく重いんだと、認識しておかなければいけないと思っています。いくら私たちが理想的な場所を作ったとしても、それはスタッフの側が思う理想にしかすぎず、利用者の方との想いとは、大きな差があると感じます。

この場所を良く整えればその重さも消えていく、という思い込みは持つていてはいけなと感じます。一つ一つの居場所が良くなつていったとしても、社会全体が変わらない限りは、この大きな差は変わらないと思います。幸せな場所を作るといふよりは、幸せな社会を作っていくか、やっぱりこの関係は変わらないと思うので、重要な問題として捉えています。私たちとしては、見えにくい障がいを抱えている方が、どういうところに苦労しているのかを発信していくことで、バイアスを少しずつでも弱めていけたらと考えています。

情報がないと分からないこともきつとあると思うので、分かってもらえないと



ギョツと閉じてしまうよりは、少しずつ開いていって、分かってもらえる機会を増やしていくことが大事だと感じています。

スタッフの間で大切にしている在り方

私たちは選択肢を提示することしかできないのかなとよく話しています。「何歳からでもリスタートできる社会へ」というのをスローガンにしていますが、それは一回やってダメだったら終わりではなくて、ダメなら次を考えると、休む時があってもいいのですが、リスタートの連続ですね。

いろいろな作業があったり、いろいろな本を置いたり、いろいろなバックグラウンドを持ったスタッフがいるということも含めて、社会を開いて見てもらうということにしています。何を感じてつかむかはその人に委ねるしかないと思っています。どんな程度の障がいがある方にも意思は絶対あって、「本人は意思表示できないから」と親御さんに言われても、必ず本人に希望を聞いてくださいとお願ひしています。話さないから意思がないわけではないので、そこを根気強く探っていく作業は大事にしたいところです。本人がどう生きたら幸せかということを常に考えたいと思っています。

夢実現のために大事だと感じたこと

より具体的に未来のイメージを描いて、まず言葉にすること。より具体的であればあるほど、言葉にした時に周りが、「そういえばあの人こんなこと言ってたな」と気づいて、人や場を繋いでくれることがあります。

あとは否定的な意見があっても諦めずに、やり抜くための方法を柔軟に考え続けていくことを大事にしています。

今後の展望

市内に事業所を点在させて、多様なサービスを提供できるようにしたいと思っています。今、一つの場所で行っていることをしているのいい面もあり、大変な面もあるので、市内にカフェや蒸留所、教室などを分散させ、それぞれの効率化を図りつつも、多様な選択肢は残しておけるような仕組みにしていきたい。数年単位で少しずつ拠点を増やしていきたいと考えています。

注1.. KOTO（東小金井事業創造センター）は、小金井市が設置した創業支援施設。施設の管理・運営を株式会社タウンキッチンが行っている。『かたらい57号』にて特集記事を掲載。

注2.. まちのインキュベーションゼミは、KOTOで行われている実践型創業プログラム。

取材を終えて

周囲の緑に調和し、建物も特徴的な、素敵な空間の「ムジナの庭」。利用者さん、鞍田さんたちスタッフさんが創り出している雰囲気そのもののような気がします。柔らかさと芯の力強さを兼ね備えている鞍田さんの「幸せな社会をつくらなく」との言葉にとても共感しました。

（秀澤 文子）

寄稿 「現代日本語における性差・ジェンダー」

～日本の配偶者呼称はなぜ男尊女卑的なのか～

任 利さん

東京農工大学准教授。中国生まれ。言語とジェンダーを研究。
博士（言語学）。日本語ジェンダー学会評議員。

著書に『「女ことば」は女が使うのかしら

—ことばに見る性差の様相』（ひつじ書房、2009年）。



ジェンダー探求

日本は男女格差後進国である

二十一世紀に入って二十年以上が経ち、世界的には男女平等が当たり前になっていく。かつて家父長制が蔓延していた時代に比べ、現在女性が社会で活躍できるようになったとはいえ、日本では依然として男女格差が大きい。世界経済フォーラムが発表した「二〇二三年ジェンダー・ギャップ指数」では、日本の総合順位は146か国中125位で、先進国の中では最下位であった。同じ東アジアの韓国（105位）や中国（107位）よりも低い。ジェンダー・ギャップ指数は、各国の男女平等・不平等を可視化する重要な指標であるため、他国が男女格差解消に努力している中、日本では男女平等が推進されていない現状が浮き彫りとなった。世界的に見ても、日本は男女格差後進国である。

日本では一九四七年に家父長制が正式に廃止されたが、家父長制の文化は根強く残されている。他国に比べ、日本では「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方に「賛成」と答えた人の割合が依然として高い。若い世代を中心に固定的性別役割分担意識はやや希薄化してきているものの、諸外国に比べるとその意識はまだ強く残っている。その結果、多くの家庭

で父親優位の家父長制が未だに維持されている。主従関係を意味する「主人」、「旦那」、「家内」、「嫁」、「女房」など、伝統的な男尊女卑や女性蔑視を反映した配偶者呼称が現在も使われ続けている。家庭は社会の縮図とも言える。社会における男女平等を実現するためには、まず家庭における男女平等を実現しなければならぬ。したがって、日本の家庭における配偶者呼称を考察することは、言語学的な問題であると同時に、日本の男女格差を解決するための焦点の社会的課題でもある。

日本の配偶者呼称には非対称性（男尊女卑の傾向）がある

言語は、鏡のように、使用者を取り巻く文化的環境や社会的価値観を反映する。さらに、文化的環境や社会的価値観の変化は、言語使用にも変化をもたらす。「性差言語」とも言われる日本語は様々なレベルで性別別しているが、一九七〇年代に行われた日本の女性解放運動により、例えば、「老女」、「老婆」、「未亡人」、「女医」など、女性を差別する表現が死語となり、多くの性別差別表現を是正してきた。二十一世紀に入り、それまでの「看護婦・看護士」が「看護師」に、「スチュワーデス・スチュワート」が「客

室乗務員」に、「保母」が「保育士」などに、職業語の性差別の是正として日本社会にようやく浸透してきているし、学校教育の現場では、「父兄」が「保護者」に言い換えられるようになった。しかし、このような社会の変化が日本の配偶者呼称にどれほど反映されているのだろうか。

文化庁（一九九九）の世論調査によると、女性が配偶者を他人に紹介する場合、「主人」を選択した人が最も多く、74.6%である。一方、男性が配偶者を他人に紹介する場合、最も多いのは「家内」で、51.1%である。二十世紀末には、「配偶者呼称として「主人」対「家内」という図式は絶対的な優勢を占めていた。しかし、「主人」や「家内」という呼称の本来の意味を考えると、「夫が主、妻が従」、「夫が外、妻が内」という意味が潜む呼称であり、性別差別的な表現であるといえる。配偶者呼称として「主人」や「家内」が無意識に使われることで、伝統的な男性優位・男性中心の社会意識が暗黙のうちに維持されてきた可能性は否定できない。

女性の社会進出が当たり前になった今、どのような配偶者呼称が使われているのか。私が二〇二三年一月に首都圏在住で思春期の子どもを持つ四十代から六十代までの日本人既婚者447名（女性230名、男性217名）を対象に行ったオンライン調査（Nin, 2023b）の結果によると、配偶者を他人に紹介する場合、女性が最も多く使うのは「主人」で、64.6%である。女性は未だに男性中心の歴史を意味する「主人」を使い続けていることが分かった。しかし、女性回答者の教育歴から見ると、大学卒や大学院卒の場合、「夫」の使用率

が高く、「旦那」の使用率が低いことが分かった。一方、男性が「家内」よりも、より中立的な「妻」(59.0%)という呼称を最も多く使う傾向が見られる。これは、最近の男性側の男女平等意識の変化を示している。

今回の調査では、女性が依然として「主人」という呼称を受け入れているのは、夫婦関係を上下関係として位置付けてもよいという漠然とした、あるいは肯定的な感情によるものである可能性が指摘でき、女性側のジェンダー意識改革の必要性も示唆された。しかし、教育レベルの高い女性ほど「旦那」より「夫」を使う傾向が見え、女性の教育機会の増加によるジェンダー意識の変化の可能性が示唆された。今後、女性は「主人」ではなく「夫」を使うようになる可能性が示唆された。しかし、調査によると、若い世代は「主人」より「旦那」の方を使うことが多い。「旦那」の語源はサンスクリット語 *danda* で「布施する人」という意味である。貧者に布施を与える上位の人物で、元来は「主人」と類似の意味合いを持ち、上下関係を表す呼称であるため、「旦那」は夫婦の対等な関係を表す呼称としては相応しいとは言えない。

専業主婦が多数派を占めていた時代から、女性の社会進出が進み、経済力を持つことが当たり前の社会へと変化したこの二十年間の社会的変化は、配偶者の呼称にも反映されつつあるが、日本の配偶者呼称にはまだまだ非対称性(男尊女卑の傾向)がある。

中国の配偶者呼称は男性優位の 家長型から男女平等の パートナー型へと変化した

よく知られているように、歴史的に東洋の文化は、かつて中国から朝鮮半島を經由して日本に流れてきた。中国と日本は、漢字の使用を含め、東アジアの様々な文化的側面を共有している。例えば、「男尊女卑」や「夫唱婦随」といった伝統的な価値観は長い間両国に共通している。そのため、配偶者呼称の使用においても、並行した側面が予想されるが、しかし、私が同じ手法で調査した中国の配偶者呼称研究(Nin, 2023b)では、中国では男女格差がむしろ小さいという結果が出ている。

中国では、若い夫婦でも年配の夫婦でも、配偶者を他人に紹介する時、夫を「老公」と、妻を「老婆」と呼ぶのが最も一般的である。かつては自由恋愛と自由結婚の象徴であった「爱人(アイレン)」という配偶者呼称は、二十世紀初頭から夫と妻の両方を指す呼称として使われ始め、文化大革命(一九六六年―一九七六年)期間中、ピークを迎え、二十一世紀の現在では使われなくなった。中国語の配偶者呼称である「老公」と「老婆」は完全に対称的ではないが、日本語の「主人」と「家内」のような主従関係の意味合いを持たない。中国の配偶者呼称は男性優位の家長型から男女平等のパートナー型へと変化したのである。

同じ東洋文化と伝統的価値観を共有しているにもかかわらず、中国と日本の配偶者呼称を比較してみると、そこに驚くほど対照的な違いがあることに気付く。一方、男女平等の考え方は西洋文化の近代的な思想

を反映したものであり、西洋諸国ほど男女平等が進んでいることは明らかにされている。近代に早い時期から西洋文化を受け入れ、西洋化において中国より先行していたはずの日本が、配偶者呼称に関してはむしろ中国よりも遅れていることを示している。

この背景には、辛亥革命(一九一一年)、五四新文化運動(一九一九年)、社会主義革命(一九四九年)、文化大革命(一九六六年―一九七六年)、改革開放(一九七八年)など、近代に始まった一連の中国社会の改革が大きく影響しているであろう。これらの変革は、男性中心の伝統的な家長制の家庭制度を崩壊させ、社会における男女平等を促進し、家庭における女性の地位を向上させた。一方、日本社会ではそのような激動な変革は起きていない。

日本の配偶者呼称に見られる「男尊女卑」の傾向から、伝統的な呼称が「本来の意味を失った単なる記号」として使われ続けているように思われるかもしれないが、「主人」対「家内」という図式に反映される夫婦関係は、互いに独立した個人としての対等な男女の関係ではなく、非対称な依存関係と上下関係である。このような配偶者呼称を使い続けることは、伝統的な男性優位の男性中心の価値観が無意識のうちに維持されていく恐れがある。言語から差別をなくすためには、言語を差別とは無縁の伝達の道具として捉える言語観から脱却し、言語に差別的な考え方が入り込む可能性があることを意識して言語を使っていく必要がある。

日本の男女格差がなかなか解消されない原因の一つとして、それが意識されないこ

とがある。これは極めて深刻に受け止めるべき厳然たる事実であるが、「日本が男女格差の大きい国」であることを自覚している人は多くない。この状況を変えるためには、日本には男女差別が見えにくい構造があることをよく認識し、長年隠されてきた意識を問い直し、男女格差を是正するための具体的な対策を講じることで、男女共同参画社会を実現する時期にきていると思う。「言語とジェンダー」の研究は、そのような問題への貴重な示唆を与えてくれると信じている。

[引用文献]

文化庁(1999)『平成10年度国語に関する世論調査』大蔵省印刷局、pp.52-56.

Nin, Ri (2023a). An Online Survey on the Contemporary Use of Spousal Terms in the Chinese Language, *Open Journal of Modern Linguistics*, 13(1), 174-193.

Nin, Ri (2023b). Uncovering Gender Bias in Japanese Spousal Terms: Insights from an Online Survey of Couples with Adolescent Children, *Open Journal of Modern Linguistics*, 13(2), 318-340.

2 国の基本方針及び都道府県基本計画の記載事項の拡充

国が定める基本的な方針及び都道府県が定める基本的な計画について、

- ①被害者の自立支援のための施策に関する事項
- ②国・地方公共団体・民間の団体の連携・協力に関する事項

が追加されます。

3 協議会の法定化

関係機関等から構成される協議会が法定化され、協議会の事務に関する守秘義務等が設けられます。都道府県においては協議会を組織する努力義務が設けられます

悩んでいるあなたへ

DV・デートDVに悩んでいる方の中には、「自分が悪かったから仕方がない」と思ってしまう方もいます。ですが、どんな暴力であっても、あなたが悪いわけではありません。あなたや子どもの安全を第一に考え、まずは誰かに相談してみませんか。相談は無料で受け付けています。プライバシーは厳守します。

相談窓口一覧

- 東京ウィメンズプラザ（DV専用ダイヤル）
TEL: 03-5467-1721 9:00～21:00（年末年始を除く）
- 東京都女性相談センター多摩支所
TEL: 042-522-4232 9:00～16:00（土・日・祝日・年末年始を除く）
- 東京都女性相談センター
TEL: 03-5261-3911（夜間・緊急の場合）
- 東京ウィメンズプラザ男性のための悩み相談
TEL: 03-3400-5313 17:00～20:00（祝日・年末年始以外の月・水・土）
- 小金井警察署生活安全課
TEL: 042-381-0110

緊急の場合は110番へ / ケガをしたら119番へ

配偶者暴力防止法が改正されました!

これまでよりもDV被害者保護を強化するため、「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護等に関する法律（以下、「DV防止法）」が令和5年5月に改正されました。

改正後のDV防止法は、令和6年4月から施行されます。

改正法のポイント

1 保護命令制度の拡充・保護命令違反の厳罰化

① 接近禁止命令等の対象の拡大

裁判所に接近禁止命令等を申立てることができる被害者について、現行の「身体に対する暴力を受けた者」と「生命又は身体に対する加害の告知による脅迫を受けた者」に加え、「自由、名誉又は財産に対する加害の告知による脅迫を受けた者」が追加されます。

また、接近禁止命令の発令要件について、重篤な精神的被害も対象に含まれることとなります。

② 接近禁止命令等の期間を現行の6か月間から1年間に伸長

③ 電話等禁止命令の対象行為の拡大

被害者への電話等禁止命令の対象となる行為に、緊急時以外の連続した文書の送付・SNS等の送信、緊急時以外の深夜早朝（午後10時～午前6時）のSNS等の送信、性的羞恥心を害する電磁的記録の送信、GPS機器等を用いて位置情報を無承諾で取得すること等が追加されます。

④ 未成年の子への電話等禁止命令の創設

被害者と同居する未成年の子への電話等禁止命令が設けられます。要件は、既存の子への接近禁止命令と同じです。この点、被害者に対してではなく、子に対して行われるという差異に鑑み、監視の告知等、著しく粗野乱暴な言動、無言電話、緊急時以外の連続した電話・FAX・メール・SNS等送信、緊急時以外の深夜早朝の電話・FAX、汚物等の送付等、名誉を害する告知等、性的羞恥心を害する事項の告知等、位置情報の無承諾取得等が禁止行為となります。

⑤ 退去等命令の期間の特例の創設

退去等命令の期間は、現行では2か月とされています。この命令期間について、被害者が単独で住居を所有し、又は賃借している場合に、6か月とする特例が設けられます。

⑥ 保護命令違反の厳罰化

現行の1年以下の懲役／100万円以下の罰金 → 2年以下の懲役／200万円以下の罰金へと加重します。

男女共同参画関連の会議に参加してみませんか

— 参加費・交通費を補助します —

市では、男女共同参画社会の形成の促進に係る会議等に参加する市民に、参加費用の一部を補助する事業を実施しています。お気軽にご利用ください。

1 補助対象となる会議等

東京都及び東京都に隣接する地域で開催される男女平等社会の早期実現を目指すための会議（宗教及び政治活動並びに営利等を目的とするものを除く。）であって、講演、シンポジウム、分科会等が行われ参加者相互の交流が行われるもの。

2 応募資格 次の条件をいずれも満たす方。

- (1) 当該会議等を開催する日現在で、本市に2年以上居住し、18歳以上の方
- (2) 男女平等及び男女共同参画に関心を持ち、地域活動及び市行事に積極的に参加できる方

3 応募者の決定

参加希望者が定員(予算の範囲)を超えた場合は、抽選により決定します。

4 参加費補助の内容

開催地までの旅費及び会議に参加するための諸経費を合算した額の2分の1

5 応募方法

申込書をご記入のうえ、男女共同参画室へご提出ください。

申込書は市役所本庁舎又は第二庁舎入口のチラシラックに配架している他、市ホームページからダウンロードできます。

小金井市 国内研修事業参加補助金

「かたらい」について読者の方から意見・感想等を募集しています。

氏名（ふりがな）、ペンネーム（記載がない場合はイニシャルとします）、連絡先を明記し、直接、郵送またはファクスで企画政策課男女共同参画室へご提出ください。 ※一部抜粋して掲載させていただくことがあります。

〈提出先〉〒184-8504 住所不要 企画政策課男女共同参画室 FAX：042-387-1224

編集後記

日常生活の中に、たくさん潜んでいる無意識の思い込み。これも、あれも、と気づいていけば、1ミリでもより良い方向へ動いていくのではなからうか。ようやく、目指す男女共同参画社会へのスタート地点に立った気がしています。

（秀澤文子）

これまでの「かたらい」を踏まえて内容を考えるということ、一冊を通して特集を考えるとということ、男女共同参画とは何か根本から考えるということを学びました。ひとつひとつが大切な記事に思えます。

（早崎沙彩）

四人の方に寄稿やインタビューでお話を伺ったが、社会との関わり方の相違により、取り上げる論点に特徴があつて興味深かった。「小金井で働く」の鞍田さんの、障がいという言葉にかかる重さについてのお話は、思わず襟を正された。

（伊集院正）

寄稿や取材にご協力いただきました皆さまに、この場をお借りして御礼申し上げます。

（男女共同参画室）

「かたらい」は、公募による市民編集委員が、企画・取材・執筆を行っています。